
平板の内心

石ころ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

平板の内心

【コード】

N6570D

【作者名】

石ころ

【あらすじ】

微妙な関係の大学生の男女、バレンタインデーのお話。

「同席してもいい？」

いきなり声をかけられて、俺は箸を持つ手を止めて頭を上げた。見知ったセミロングの女性だ。名前は萩原愛美。

俺はちらりと辺りを見回した。ほぼ満席で席を探してうろつろつとしている人もいる。この状況なら、まあ仕方ないだろう。

「べつにいいけど」

簡素な言葉を口にして食事に戻る。萩原は「ありがと」と礼を言う。と、トレーをテーブルに置いてから椅子に座った。

「あれ、またラーメン？」

「……たまたま今日これにただけだつて。それを言ったらそつちだつて前と同じ注文じゃん」

「まあねー」

そう言つて、笑いながらスプーンを持ってカレーに手をつける。

それからはあまり会話をせず淡々と食事を進めた。だいたいいつもこんな感じだ。

萩原と初めて会話をしたのは同じ授業で隣席同士になった時だつた。その日、俺はたまたま筆記用具を忘れてしまい、おずおずと彼女に貸してくれるよう頼んだ。彼女は快諾してくれて、俺はノートを取り逃すことを免れた。そこで言葉を交わしたのは授業の始終だけだつた。

翌々日、また彼女と同じ講義を受けることになった。教室に入ると、後ろの席はほとんど埋まっていた。前のほうはどうも苦手なので空いているところを探していると、彼女の隣が残っていた。一昨日に物を借りただけに、さすがに無言でいるのも失礼と思い、俺は「あの時はどうも」と声をかけながら席についた。この時、教授が教室に入ってくるまでいくらか会話してから、それ以来同じ授業では同席することが多くなつた。

……といつても、それ以外で一緒にいることなどほとんどなく、親しい友とは言いがたかった。今日だってその時の俺のように、たまたまこの席が空いていたから選んだだけなのだから。前にも食堂で同席したことはあったが、その時もやはり混んでいたただけだ。誘ったこと、誘われたことは一度もない。

しばらくしてどちらかが食べ終われば、一方を待つことなく席を立つことだろう。前だってそうだった。もっと良い関係になりたい、という思いもあることにはあるが、なんとなく自らが積極的になつていくのは気が引けた。もともと俺は内気な性格なのだ。そのせいで部活に入っていた高校時代はともかく、バイトのためにサークルなどに入っていない今は、大学内の友人と呼べるようなヤツは一人もない。……はたから見れば、俺と萩原はどういう関係に見えるのだろうか。

「ごちそうさま」

そんなことを考えながら、俺はラーメンを完食した。例の如く「んじゃ」と軽いあいさつをして席を立とうとした時、萩原は「ちょい待って」と俺を引き止めた。

「ほい」

と何かを差し出してくる。見ると、市販されているよく見る板チョコ。コンビニで百円ちよつとで買えるようなものだ。俺は顔をしかめて訊ねた。

「……何これ？」

「見てわかんない？ バレンタインデーだからあげる」

笑って答える彼女に、俺は「……ども」と短く言って受け取った。男として義理チョコほどむなしなものはないと思う。これ以外で貰えるチョコは、もちろんうちの母さんからだけだろう。バレンタインにチョコを贈るって誰が始めたんだ？ クリスマスとバレンタインは特定の間人にとっては本当に憂鬱な日だ。

「あ、そうそう。大学の中でそれ食べるのは止めたほうがいいよ。そういう人に見られるし」

「余計なお世話だ」

そんなことをするほどバカではない。俺は貰ったものをバッグにしまい肩にかけると、今度こそトレーを返すために席を立った。そして萩原の横を通ろうとした時、軽い調子の声をかけられた。

「ちゃんと家で食べなさいよ」

「んな何度も言わなくてもそうするっての」

むなしくなる追撃を受けて、俺は苦笑しながら彼女を後にした。

大学後のバイトから帰り、俺は自室に直行した。ばたりとベッドに倒れ込み、ぼーっと天井を見上げていると、妙に小腹がすいてきた。いつもより店長が酷使してきたせいだろう。……そういえばあの人が、独身なんだっけ。

それが原因だったらなんとも迷惑な話だ、と思いながら何か冷蔵庫からつまもうと部屋を出ようとしたところで、萩原に貰ったものを思い出した。まあ腹の足しになるだろう、ということであはバッグから板チョコを取り出した。

外側の包みをはがしたところで、アルミ箔に一枚の紙がセロハンテープで止められているのを見つけた。その紙には電話番号とメールアドレスがかかっている。

「……………」

やっと理解した。そういえば、しつこく家で食べと促していたのはこのためか。軽いヤツだと思っていただけ、かわいいところもあるもんだ。

……と、考えている場合ではない。俺はどうすりゃいいんだ？十分近く考えあぐねた挙句、俺はとりあえず彼女に電話をかけた。少しして相手と繋がった。

「あ、もしもし？」

「バカじゃないの？」

一瞬、思考停止する。開口一番にバカってなんだ？ どうも女の考えていることは理解しがたい。文句を言っただけで口を開きかけた時、向こうから先に言われた。

「ホワイトデーに同じようにこっさり伝えるとか、そういう趣向とかないの？」

「……………ああ」

なるほど、そういうことか。俺は呆れ混じりに「気が利かなくてスマン」と謝った。なんというか、この調子だとネタで贈った感じだよな。

痛い期待を打ち砕かれながらも、俺はちょっと抗議をしようとして、また先を越されてしまった。

「……………メールアドレス、ホワイトデーによろしく」

「え？」と言った時には既に通話を切られていた。唐突なこと、俺はその場で硬直していた。これは、つまり、そういうことか？ しばらくして、俺は微笑を浮かべながらケータイをしまった。明日、あいつがどんな反応をするのか楽しみでしかたない。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6570d/>

平板の内心

2009年3月25日13時20分発行